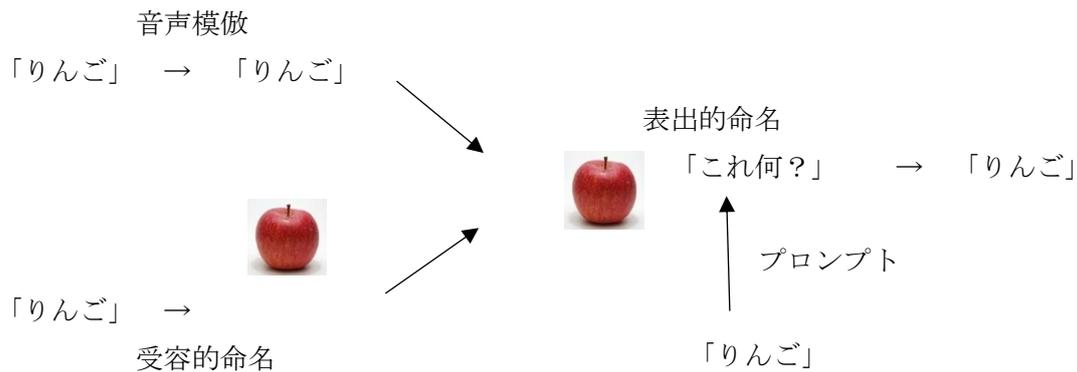


ことばの構築

2022. 10. 15 北陸定例会
藤坂龍司

ことばの構築見取り図

ことば（音声言語）の構築のカギになるのが、音声模倣。



1. 音声模倣

<ゼロから音声模倣を構築する方法>

シェイピングを使って、徐々に目標に接近。

自発的発声をすべて強化

↓

大人の発声の直後の発声のみ強化

↓

大人の発声に似た発声のみ強化

↓

大人の発声と同じ発声のみ強化

<もう少し楽な方法>

いきなり大人が何か発声して、まねできるものがないか、探してみる。いくつかあればそれを手がかりに、音を徐々に増やしていく。口形模倣や手指のプロンプトも使う。

口形模倣

大きな口を開ける → ア 舌を出す → エ 口を閉じる → シ

手指のプロンプト

手のひらで口を閉じて、息を貯めて → バ 唇を指ではじいて → ブ

上下の唇をつまんで → シ 手のひらに息を吐く → ハー

(2) 初期の手順

向かい合ってすわり、効き目の強い強化子を用意する。

試しにどれかの音を発してみる。まねできたら、すかさず強化。まねできなくても、違う音でも返ってきたら、やはり強化する。違う音が返ってきたら、それにこちらが合わせればよい。

か → た 「上手！」 た → た 「すごい！」

○いろいろな音を試してみて、それと似ていなくても、偶然でた音をターゲットに組み入れていく。

×「あ、い、う、え、お」の順にやらない。

機械的に、ではなく、なるべく出しやすい音から。

○「あ」「お」のタテの列が出しやすい。子音（ヨコの列）だと、あ行、ば行、ぱ行、わ、や行、だ行、た行などが出しやすいので、最初に試してみる。

○単音にこだわる必要はなく、むしろ最初は連続音の方が出しやすいことが多い。また単音だとでないが、単語の一部としてなら出るのなら、単語模倣からでもよい。

「ま」より「まま」 「ぱ」より「パパ」 「や」より「いやいや」 「わ」より「わんわん」

(3) 音を増やす

○模倣できる音の確認が済んだら、本格的にまだ出ない音を引き出す作業に入る。

○床に足を伸ばして座るなどして、大人を目線をできるだけ下げる。子どもが大人の口元をよく見えるように。

○言いやすそうな音を、やや大きな、クリアな声で短く言う

。

○違った音が返ってきても強化する（全強化法）。

○すでにいくつかの音を模倣できる場合は、それを一回ずつ模倣させながら、時々新しい音を試してみる。言える音を、予測できない順番で提示され、それを模倣するうちに、音の違いに敏感になり、新しい音を聞かせても、なんとかまねしようという行動が引き出されやすい。

○コントラストをつける。

例えば「あ」行で、「あ」と「お」が言えて残りが言えないのなら、「あ」→「お」→「い」、あるいは「あ」→「お」→「う」と口の形をはっきり変えながら言ってみる（最後の音がターゲット）。すでに模倣できる、似た音（例えば同じ行の音）を先に聞かせることで、新しい音がそれらの音と違うことがクリアになり、子どもの正確な模倣を引き出しやすい。

×文字カードを見せながら音声模倣する人がいるが、あまりお勧めしない。文字ばかり見て、音や口の形に注目しないから。

<「た」行の出し方>

た行が出ない場合は、自分の口に自分の指を近づけ、指の先に舌の先をつけさせる。その指をパッと離すと、「た」が言えることがある。

<「か」行の教え方>

・こちらが「か」というと「た」と言ってしまう子どもに限る。

子どもの口に二本指か、アイスの平たい棒を入れ、舌の前半分を軽く押さえる。その状態で「か」と言うと、子どもは「た」と言おうとするが、舌の先端で上あごをはじくことができず、勢い、舌の後ろの方でのどの奥をはじくことになり、「か」が出ることもある。

(4) 音節・単語の模倣

<二音節>

○50音表の半分くらいが埋まったら、単音模倣と平行して、音節・単語模倣へ。まずは二音節から。

○意味のあるなしにこだわらず、二音のいろんな組み合わせを練習する。ただし言いにくい組み合わせは避ける。

○二音は、だいたい次の順に言いやすい。言いやすい順に練習すること。

- ①同音反復 まま、 パパ、 だだ
- ②母音混じり あい、 あか、 たい、
- ③同子音異母音（同じ行） まめ、 たて
- ④同母音異子音 かた、 また
- ⑤異母音異子音 ぶた、 こま、 かに

○最初は一音言って、子どもが一音目をまねしたら二音目を言うようにする。そこから徐々にスピードを速め、子どもが一音目をエコーするかしないかのうちに、二音目を言うようにして、まねさせる。最後はこちらが二音を言ってから、子どもにまねさせる。

<三音節>

例えば「たまご」が言えない場合は、「たま」と「まご」に分解して練習。

「たま」が言えるようになったら、周辺から徐々に「たまご」に接近。

たまま、たまめ、たまた、たまで、たまち、たまが、たまご

あるいは「まご」から接近。

ままご、やまご、なまご、あまご、かまご、たまご

<単語>

○たいていの単語は、三音節までで発音できる。

「しんかんせん」は「しん」で一音節。「しん・かん・せん」で三音節と考える。

「し・ん・か・ん・せ・ん」のように言わせない。

2. 音声模倣から意味のある言葉へ

(1) 受容的命名から表出的命名へ

受容的命名ができる物で、しかも音声模倣でも、他と区別できる程度に発音できるものを使う。

例えば、ぞう、ぱんだ、かめ（かか）

受容的命名で選ばせた直後に、選んだものを持ち上げて、指さしながら、名前を言わせる。最初はプロンプト。

大人「ぞう」→ぞうをさわる →大人がぞうを持ち上げ、指さしながら「ぞう」→子ども「ぞう」
プロンプトをなくしていく。

「ぞう」 → 「ぞ」 → プロンプトなし

「ぞう」が言えたら、その勢いで、他の二つも続けて取り上げて、指さすと、プロンプトなしでも言えることがある。

(2) 要求表現

「ちょうだい」

「あけて」

「きて」

などの要求語の自発と使い分けを教える。